

2019年5月22日（水）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌  
松平莉奈さんWS  
『吉原大全』と『遊子方言』を読む  
—18世紀の美意識とは—

1, これまでのワークショップをふまえて

2019年5月22日（水）、松平莉奈さんと2019年度初回のワークショップを行いました。

これまでのワークショップをふまえ、黄表紙<sup>1</sup>に関心を抱いた松平さん。2018年度の成果として、黄表紙の祖である『金々先生栄花夢』<sup>きんきんせんせいえいがのゆめ</sup>を模写されました<sup>2</sup>。



<sup>1</sup> 安永4年～文化3年（1775～1807）に江戸で出版された、大人向けの絵入読み物。

『金々先生栄花夢』には、主人公の金々先生が吉原で遊ぶが、金に物を言わせる様が野暮なのでモテないという描写が出てきます。



『吉原年中行事』  
吉原での様々な  
風習が描かれる。

こういった遊里での美意識の描写は、当時流行していた洒落本<sup>しやれぼん</sup>というジャンルの読み物からの影響を受けています。洒落本とは、戯曲のように台詞とト書きで進行する読み物で、吉原や深川などの遊里が舞台となっています。当時は遊里で最新の流行が生み出されていたため、そこに集う人達もその美意識に敏感で、そういった人達のことを「通<sup>つう</sup>」・「通り者」と呼びました。そして、あまり分かっていないのに分かった振りをする人のことを「半可通」と呼び、野暮なものとして嫌いました。

<sup>2</sup>

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/matsudaira\\_handwriting\\_copy.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira_handwriting_copy.pdf)

2019年5月22日（水）

さて、黄表紙は、通人たちが自分たちの美意識（＝洒落本の世界）を、子どものおもちゃである草双紙（＝絵本）に落とし込み、そのギャップを面白がったものです。

そこに注目した松平さんからは、通の概念に触れてみたいと、吉原でのしきたりや美意識を綴った『吉原大全』と、洒落本の定型を作ったとされる『遊子方言』についてのワークショップをしたいと、希望をうかがいました。

## 2, 通の美意識／洒落本の世界

『遊子方言』（田舎老人多田翁作。明和7年（1770）頃江戸刊）は、その後の洒落本や黄表紙に大きな影響を与えた作品です。

洒落本は、「むすこ」と呼ばれるお坊ちやまを、自分はお洒落で遊び慣れていると思っている「半可通」が遊里に誘い、遊び方を伝授しようとするものの、だんだん半可通の中途半端さが明るみになり、最終的に半可通はふられ、むすこがモテるというパターンがありますが、その定型を作ったのが『遊子方言』だと言われています。

そしてその間に遊里のさまざまな情景を描いたり、夜が更けてゆき、また朝に別れるという時間の流れを描写するというものです。

たとえば次のような場面があります。「通り者」と自称する半可通が、むすこを吉原の茶屋へ連れて来て、常連ぶる場面です。

**通り者** いつもにぎやかで、多事だの。ひさしぶりで、この内へは来たぞ

といへども、女房は何がしちう、わからぬ顔にて

**女房** ぶしつけながらおまへ様は、お見わすれ申しんして御座りますが、あなたはどなた様で御座りましたね（『新日本古典文学全集 洒落本・滑稽本・人情本』）



「通り者」という顔をしている男は、いつもこの店に来ているぞ！というアピールをしたいあまりに、店について知ったような口をききますが、店の女房には全く認識されておらず、恰好をつけることができないという場面です。後輩の前で良い恰好をしたいという見

2019年5月22日（水）

栄と、業界人の醒めた目線とが好対照で笑いを生み、「こういう場所で知ったかぶりをするのは野暮なのだな」という教訓にもなります。

当時どころか現代でも「あるある」という場面ですが、こういった情景を鋭く言い当てるのが「うがち」という方法です。「穴をうがつ」とも言います。

「穴」とは、世の中のまだ誰も気づいていない新しいこと、もしくは当たり前過ぎて誰もが見過ごしていることを指し、「穴をうがつ」というのは、それらを鋭く指摘することを言います。

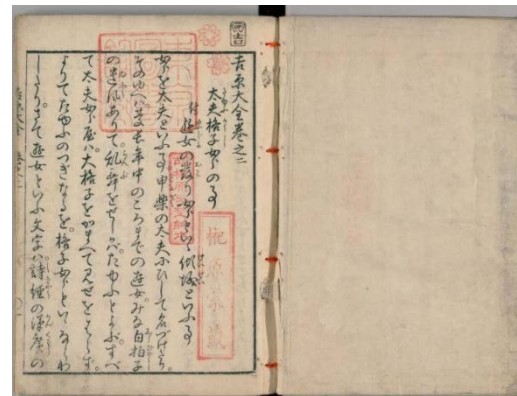
たとえばまだ誰も知らない吉原で流行り始めたファッションや言葉について言えば、それらを知っている通人たちは、知っているという優越感に浸りつつニヤニヤするでしょう。また、誰もがなんとなく「こういうことは恰好悪いな」と思っていることについて、「半可通」というキャラクターを通して書けば、笑いが起りつつ誰もが我が身を振り返るでしょう。

ワークショップでは、“今「むすこ」を演じるとしたら、芸能人なら誰だろう？”“この作者が一番うがっているのは、誰なんだろう？”と、賑やかに読みました。

## 2, 吉原の情報

また、『吉原大全』<sup>3</sup>（明和5年〈1768〉）は、吉原の様々な風習について簡略にまとめられた本で、用語やしきたりの歴史も学べる便利な一冊なのですが、松平さんにご紹介する前に色々と資料を読むなかで、当時流通していた隣接するジャンルと同じ性格がいくつも組み合わせられていることに気がきました。

まず序文は談義本、中身は考証と遊興論に分かれているのではないかと思ったのです。



<sup>3</sup> 画像は国立国会図書館デジタルコレクションより引用。

(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554390?tocOpened=1>)

2019年5月22日(水)

談義本とは、江戸時代中期に流行した、何人かで議論をしつつ、穴をうがつという形式の読み物です。

また、さまざまな風習や言葉について、いつ、どこから興ってどのように変遷しているのかについて解説している部分があります。資料を用いながら古い物事について明らかにする学問のことを「考証」といい、江戸時代中～後期にかけて流行します。

そして評判記的な性格もあります。

評判記とは、役者や遊女、その他なんでもランク付けをしている便利な本です。

たとえば役者評判記は、黒色の表紙で、半紙二つ切の横長の本(約11cm×15~16cm)、三冊で1セットというのが定型<sup>4</sup>です。三冊セットなのは、「京・江戸・大坂」など、三都の役者について言及したものが多いからで、『役者○○○』という<sup>げだい</sup>外題を持つものが多くあります。

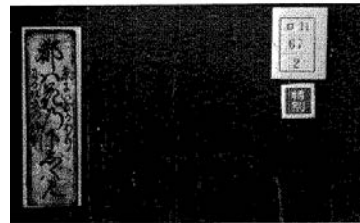


図3 元禄十二年刊『役者口三味線』京の巻の表紙・題簽(早稲田大学演劇博物館所蔵)。各巻それぞれに違った文句が記される

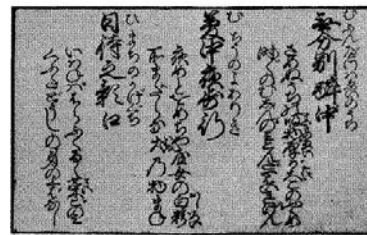


図4 『役者口三味線』京の巻の目録初丁

当りを取った(評判になった)役者をランク付けしているのですが、それ以外にも、芸の特徴や、得意な演目の見どころなどについても書かれている優れたもの、毎年正月と三月の二期に定期刊行されるため、常に最新情報が記されている本でした。当時の歌舞伎ファンにとっては必携の書ですね。

『吉原大全』にも、遊女や店のランクについて言及されており、なんだか評判記を彷彿とさせるところがありました。

#### 4,18世紀の文芸

さて、このようにさまざまな性格を持った『吉原大全』を、どのように考えれば良いのでしょうか。ただのハウツー本ではなさそうです。

ために、この日扱った資料の成立や、作者の誕生順に並べてみると、次のようになりました。

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 元禄12年(1699) | 『役者口三味線』刊行(江島其磧作) |
|             | : 評判記の定型成る        |
| 享保7年(1722)  | 享保の改革開始           |

<sup>4</sup>園田学園女子大学近松研究所編集・発行『役者評判記の世界』(2009年)

2019年5月22日(水)

- 享保12年(1727) 『田舎荘子』刊行(佚斎樗山作)  
: 談義本の定型成る
- 享保17年(1732) 沢田東江生
- 延享元年(1744) 恋川春町生
- 宝暦4年(1754) 『千石篩』刊行: 談義本の代表作のひとつ
- 明和5年(1768) 『吉原大全』刊行(沢田東江作)
- 明和7年(1770) 『遊子方言』刊行(田舎老人多田翁作)  
: 洒落本の定型成る
- 安永4年(1775) 『金々先生栄花夢』刊行(恋川春町作)  
: 黄表紙の祖
- 天明7年(1787) 寛政の改革開始  
『通言総籙』刊行(山東京伝作)  
: 洒落本の金字塔
- 寛政元年(1789) 恋川春町没
- 寛政八年(1797) 沢田東江没
- 文化元年(1804) 『近世奇跡考』刊行(山東京伝作)  
: 考証随筆の金字塔

一覧してみると、18世紀に色々なジャンルの定型ができ、成熟していったのが分かります。

18世紀は、江戸という都市が成熟し、次々と新しい文芸が生まれ

てきた時期でした。そんな時代の先駆けとなったのが談義本といわれています。洒落本も黄表紙も、同じような時期に同じような作者が作って楽しんでいたのですが、彼らが体験した読書や文芸の影響を受けているのかもしれない。

黄表紙が成立した背景に目をやると、18世紀の文化人たちの美意識について考える必要があることが分かってきました。

